

わたしの好きな よりのい

No.134



今年発行された、「広報よりのい」3月号に「末野大橋から望む玉淀湖」の写真が紹介されていました。



加藤貞夫さん
(常木)

青緑色の玉淀湖と青空のコントラストが美しい眺めでした。その眺望に引けを取らない絶景を皆さんに紹介します。寄居橋から南方を望んだ風景です。新緑に包まれた玉淀湖とその水面を悠々と渡るカヌー。ゆったりとした時の流れを感じさせるこの眺めは、多忙な私たち現代人の心を優しく癒してくれます。

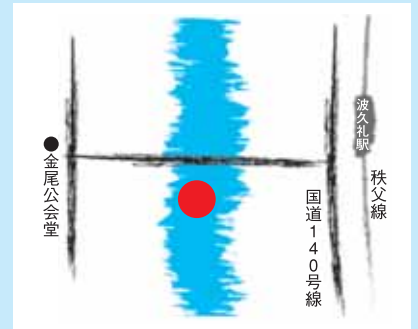
私は、秩父鉄道から委託を受け、

波久礼駅で旅客業務の仕事をしています。仕事から、この地を訪れる観光客に風布の「日本水」や金尾山の「山つつじ」を案内する機会が度々あります。これらの名所について、来訪者に説明をする度に、「寄居」という町の素晴らしさを自分自身でも再確認している毎日です。

これからの季節は、「新緑に包まれた玉淀湖」の眺望を町の名所

<新緑に包まれて>

の一つに加え、来訪者に紹介してみようかと考えています。



わが町の 達人

和太鼓の達人 No.3



森下富夫さん (三品)

カカツ、ドンドン…ドコンコ。300m離れた場所にも聞こえてきて、自然に身体が躍動するリズム。お祭り、慶事などさまざまなイベントを盛り上げるのが和太鼓の独特の響きであり、魅力の一つです。

私は、幼少の頃からお祭りに参加し、太鼓に触れ、まさに太鼓とともに人生を歩んで来ました。太鼓好き

このコーナーは、「寄居生活学の達人」として町に登録をいただいている町民講師の方々を中心に、そのうちくちや技術、体験などを町民の皆さんに紹介するコーナーです。

が高じて、6年前から今年3月まで「三品石尊太鼓保存会」の会長を務めて参りました。石尊太鼓は、三品地区にある「高山石尊神社」のお祭りの呼び太鼓として昔から伝承されてきたものであり、早いテンポで力強く太鼓を打ち込むのが特徴です。

今は、毎月2回行われる定例練習会が楽しみで、地区内の子ども達と一緒に汗をかいています。リズムは感覚で覚え、身体とバチが自然に動かなければなりません。そのためには何十回、何百回もの練習を重ねてリズムを身につけ、打ち手の息を合わせる必要があります。

和太鼓は、他の楽器のように、音階別に音が出る楽器ではありません。太鼓の大きさ、皮の張り具合、バチの種類や叩くときの強さによって、打ち手の気持ちを表現する楽器です。また、その日の気温や湿度により胴や皮の張り具合などが変わり、叩いたときの音が違ってくるため、非常にデリケートな楽器といえるでしょう。しかし、難しく考えることはありません。

昨年、折原小学校の児童を対象に、文化庁関係の事業である「伝統文化こども教室」を開催しました。次世代を担う子どもを対象に伝統文化を体験させるという事業でしたが、短期間の指導にもかかわらず、子ども達はめきめきと上達していったからです。教室に参加した子ども達は、「太鼓が大好きになりました。練習日が待ち遠しい」「皆と心をつなぐことを学んだ」などと話してくれました。

地域における人間関係の希薄化がすすむ昨今、皆の心をつなぐことができる「和太鼓」の魅力に皆さんも触れてみてはいかがでしょうか。

